
ロリコンで何が悪い!!

しょーちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロリコンで何が悪い！！

【Zコード】

Z2843M

【作者名】

ショーチャン

【あらすじ】

朝傘を忘れてしまった青年が雨の中走って家に帰る途中幼女とぶつかってしまった。

青年は慌てて『大丈夫？』と言つたが

幼女は『大丈夫』と言つた瞬間倒れてしまった！！

青年は仕方なく自分の家に幼女を運んだのだが！？

第一章出合い・・・(前書き)

処女作なので至らない点だらけですかどうかその辺の心で見守って
ください！！

アドバイスもよろしくおねがいします。
これからも精進していいくつもりです。

第一章出会い・・・

それは、高校に入つて3回田の蒸々とした梅雨の時季だった。

その日の夕方の放課後俺は窓の外を見ながら傘を忘れた事を思い出した。

雨の中走つて帰らなきゃいけないと思つと、とても憂鬱な気分になつた。

『ああ、糞！ 昨日深夜までゲームするんじゃなかつた！！』

そんな事を後悔しながらびしょ濡れになつて帰り道を走つて帰つていた。

すると、急に大きな物体と衝突して俺は派手にこけた。

『いてて・・・なんなんだよまつたく・・・』

ふと顔を上げるとそこには俺とぶつたかったと思える幼女が同じく転んでいた。

『君！ 大丈夫かい？』

俺は咄嗟に幼女に声を掛けた。

『いやうううう、『めんなさい！ はい、大丈夫です』

幼女は、そう言いつつも足からは血が流れている。どうやら掠り傷だけの様だ。

『怪我をしてるじゃないか！ぶつかったのは俺のせいだし怪我の手当をさせてくれないか？』

俺はそう言つたが幼女は

『いえ、本当に大丈夫・・・』

と言いかけて幼女は倒れた。

『！？』

俺は幼女に駆け寄り声を掛けた。

『おい！！君！！大丈夫か！？』

なんだ呼びかけても幼女は起きなかつた。

もしかしたらぶつかって転んだ拍子に頭でも打つたのかもしれない
！！

このままではいけないと思つた俺は幼女を負ぶつて家まで全力ダッシュして帰つた。

雨が降つた中俺は幼女を負ぶつて帰つたのでびしょ濡れになつて帰つた。

俺は幼女を畳の上に寝かせてびしょ濡れになつた服を脱がせる。

ああ、どうしたものかと思いつつ仕方なく俺は自分の服をタンスか

ら出して幼女の着替えに移つた俺も男だからやはり少し恥ずかしく思ひ。

幼女の着替えを終えて、自分は幼女に怪我をさしてしまった事を思い出して、幼女に絆創膏を貼つた。

それでも幼女はまだ目を覚まさないので、俺はそつと幼女を布団に寝かせる。

さつきまで雨で濡れていたから、風邪を引いていいか心配だが、今のところは熱は無さそうだ。

と、幼女の額に手を当てたところで気が付いた。この幼女……美幼女だ！

どこが美幼女かと言つと白い肌、髪はサラサラで天然色のこげ茶色、顔は今までに見たことが無い程の可愛さ…

果たして一人にさしては大丈夫かと心配しながら俺は晩御飯の材料を買いに、買出しに出た。

それから数時間後・・・

買い出しから帰つて来た俺は取り合えず買った材料を冷蔵庫に納めていく。

そうしていたら丁度幼女が寝ている部屋から物音がした。俺は幼女が起きたのだろうと部屋を覗いて見た。

するとそこに見えたのは

な、なんとも可愛らしいリボンが付いたパンツだった・・・

幼女はしばりくわの姿勢で固まつたまま次第に頬が赤くなつていき

叫んだ！－！

『キヤア~~~~~！－！－！』

まだ幼くもキンシと響く高音が俺の鼓膜を揺らす
顔が赤くなつた俺は咄嗟に『じつー ジめんー』と叫つて扉を
閉めた。

しばらくして扉をノックしてみた。

『どうぞ』

と言つ声が聞こえて俺は部屋に入った。

・・・空気が重い、何か話題を切り出さなければならぬと俺の脳
が警報を鳴り響かせている。
やばい！－ これはやばい！－ そつは思つてこるものな物話題が
見つからぬといつする！－？ 俺！－

一つの言葉を吐き出すように口から漏らす

『よひよ、調子はどう？』

と俺が言葉を言い終わるか終わらないかの時に

『別に特に変わったところはありません』

と囁ひ言葉が返つて来た。

『 も、もひですか・・・』

またもやズンと空氣が重い・・・すると今度は幼女の方から質問が飛んでくる。

『 こには何處ですか? 貴方は誰ですか? 』

そう言いながら多分俺への恐怖心のせいか幼女の声は震えてくる。

『 僕は柳田将つて言うんだそれで』は俺の寮つて訳、君名前は?

『

『 村方・・・望です』

『 ひやひやの子は望ひやまとひりじ。つむ、名前の同様にやは
り可愛い』

『 そつか望ひやんつて言つのか宜しへーーー』

『 よ・・・宜しへお願ひします柳田さん・・・』

「む、」惑つ姿もやはつ可愛いな望ひやん。

『 まあ、血口紹介ものぐらにして俺は飯を作ることにゅるよ、
望ひやんお腹空つてこむでしょ? 何が良い? 』

『 じゃあオムライスで・・・』

『ん、わかつたんじゃ少し待つて』

俺が料理に取り掛かるとした瞬間

『いや、やうじやなくて！』

とこきなり望ちゃんが言った。

『なんで私が柳田さんの家に居るんですか！？　あの時私は大丈夫って言つたじゃないですか！！』

『その後倒れたくせに、どう考へても大丈夫じゃないよ！』

『だからと書つて家に連れてくるなんておかしいじゃないですか！』

！』

『いや、全然おかしくないから！－－　氣絶している女の子を放つて置く方がおかしいよ！－－』

『あのまま放つて置いてくれれば死ねたのかも知れないのに・・・』

『！？』

今なんて言つたんだ？

聞き間違いじゃないと良いが・・・

こんな小さい幼女が死にたいって・・・いつたい何がこんな幼女を死にたいと言つまで駆り立てたのだろう？

『お前馬鹿か？　自分の命を軽々しく見てんじゃねえ！！』

自分の命を大切しない幼女に

俺は荒々しく声を上げたこの子がどんな気持ちで「死にたい」と口にしたのか分からぬが俺はこの怒りを抑える事が出来なかつた。

『柳田さんは、何も知らないからそんな事が・・・』

『ああ、知らないね!! 望ちゃんが今何を思つてゐるか、何を考えてゐるかなんか全然わからねえ!!』

そうだ望ちゃんが何を考えているか全然わからない。
でもこの幼女本当はわかってるはずなんだ!! 自分の命を捨てるのがどれ程辛いことか・・・

すると望ちゃんは声を震わして言つた

『私に帰る所なんか・・・』

それはとても弱々しくて、触れてしまえば消えてしまいそうな声だつた。

小さな瞳から大きな涙が落ちた

そこで俺は感情が高ぶったのか知らないが言つてしまつた・・・

『行くところがなら、俺の家に住めばいい!! 帰る家が無かつたら、

この家に住めば良いじゃないか!! ここには君の居場所もある!!
! 帰る家もある!! そういう解釈は無かつたのか!?』

『それって迷惑じゃ・・・』

『迷惑なもんか！！ そんなの死なれる方が迷惑だーー。』

それ以上望ちゃんは何も言わなくなつた・・・いやでも俺には最後、
小さくこいつ聞こえた・・・

『ありがとう・・・』と

その声はとても小さかつたけれど、でも確かにその言葉にはとても
暖かい偽りじやない何かが詰まつてた気がした。

『よし、それじゃ 飯にするかー少し待つてくれなオムライスだ
つけ？ すぐ作るからさ』

俺は笑顔でそう言った、そしたら望ちゃんは

『私も手伝いますーー！』

と笑顔で言つてくれた。

その笑顔は本当に飛び切り可愛い笑顔だった。
そして俺は心に決めたこの幼女は俺が守ると・・・

ここから俺と望ちゃんの物語は始まつた。

第一章出会い・・・（後書き）

Q日本語おかしいんじゃねえの？

A処女作で語彙力が無いのでお許しください

Q句読点おかしくない？

A処女作で語彙力が（ゝゝ

Q変態

A変態ですよ？

Qロコロ

Aロリゴンド良こむしゅロコロんで良こくさく

第一章同居人前半…（前書き）

前回はどうだったでしょ？

語彙力が全然無い俺にとっては小説を書く事は無理だと思ってましたけど

結構楽しいので続けてみる事にしました。

それでは第一章前半を見て楽しんで頂けたら俺はそれで満足です。

第一章同居人前半…

次の日の朝、まだまだ降り続ける小雨が、部屋におぼろげながら響き渡る。

『 もう朝か…』

俺はまだ、重たい瞼を無理矢理抉じ開けてそう言った。まぶた

時刻を見てみると午前6時30分・・・俺はもう一度寝ようとすると

『あ、おせよひじわこます柳田さん』

と囁つ声が聞こえてくる。

俺の隣には起きたばかりの望ちゃんが居た。
望みちゃんが、眠そうにしながらそう言った。

その姿は滅茶苦茶可愛かった。

俺が生きていた中で一番可愛いものかもしれない。

そんな邪念を振り払いつつ俺は望ちゃんに言った。

『ああ、おせよひじわさん

すのと望ちゃんもう一度眠そつな声で

『おせよひじわさん

と言つた。

その顔を見たら、自分の顔が少し赤くなつたので、それを誤魔化す
よつて

『よーし！ 飯でも作るか！』

と勢いよく立ち上がつた。

すると望ちゃんは少し慌てたよつて

『あ、私も手伝います！』

と言つたが俺は

『いや、いいよすぐ出来るから少し待つてね。それまでそこの方
やぶ台までも座つてて』

と言つて、朝飯を作りに台所まで歩いて行く。

台所に立ち、何を作らうと考えながら冷蔵庫の中を見たら、卵、ウ
インナー、ほうれん草があるから

今日の朝じはんは、ほうれん草の玉子とじウインナー入りを作ることにした。

俺の家族は、母親が料理が苦手であり、父親は単身赴任、姉は料理
はおろか家事だつて出来ない人だ。

だから俺は家族の中で一番料理が出来ると確信している。

そんな事を思つていろいろに料理が完成する。

俺は望ちゃんの座つてこむ所まで、料理を運んで行く。

『はー、お待たせ、出来たよ』

『あ、ありがとうござます』

望ちゃんがモジモジしながらそう言った。

まだ緊張してこののかわからなこが、望ちゃんは未だ少し落ち着かない様子だ。

そりゃ俺だって、未だに幼女が自分の家に居るなんて、信じられないと…

その後、俺達はちやぶ台に箸や茶碗やらを並べてよりくへ食事が出来る形になった。

そして、一人で合掌して

『頂きますーー！』

と声を合わせて食事に取り掛かった。

『あ、このぼうれん草の玉子どじとも美味しいですーー！』

そう言つて望ちゃんはモグモグと食べ進んでいく。

『わつか、それはお気に召して向よつ』

俺はそう答えた。

そんな姿を可愛いらしさと想つて、昨日の薙葉が忘れられなかつた。

『 あのまま放つて置いてくれれば、死ねたのかも知れないの』……『 未だになんで望ちゃんがあんな言葉を言つたのだろうかと、疑問が膨らんでつい聞いてみたくなる。

が、俺はそんな疑問をふりはらって思った。

うむ、やはり今日も良い出来だ、俺実は料理人になれるんじゃないか!?

と阿呆な事を思いながら自分の料理に手をつけていく。

ようやく食事が終わり、一人で立掌して食器をおぼんの上に乗せて流し台に流した。

俺は食器を洗いつつ、望ちゃんと他愛も無い話をしていた。

『 わつこや望ちゃん。俺には姉貴が居るんだけど、その姉貴がダメダメでさー……』

俺がそこへつと

『 へえ、どんな風にダメなんですか? 』

と望ちゃんが頭にはてなマークを浮かばせて可愛い顔でそいつをついた。

『 わりやもう、家事は出来ないし、性格は乱暴だし、だらしないしきつたもんでさあ……』

俺は呆れながらひきつひとつと、望ちゃんも少し困った反応を示していった。

そのとおり……

ドーンドーンドン――

と大きな音が部屋中を満たした。

なんだかうつと思つて、誰かがドアをノックしたみたいだつた。

『はーい、今開けますー』

と言つてドアの覗き穴を見てみると…

っ！？

そこには、なんと母親と暮らしていたと思われた姉の姿があつた！
！！！

『将一開けてよーお腹空いたよー』

そんな事を言いながら姉は必死にドアを叩いていた。

『ばつ、馬鹿……なんで居るんだよ姉貴…………』

俺は慌ててそう言つた。

『お姉ちゃんに向かつて馬鹿とは何よー早く開けないとこのドア壊しちゃうよー』

言い忘れていたが姉貴は空手、合氣道とあらゆる格闘技を完璧に取得していた。

それでも俺は、たまに姉貴に切れで喧嘩を売るのだが、その結果は物凄く悲惨な結果に終わっている。

まあ語ると物凄く恥ずかしいのだが…

そんな事を思つてみると、とうとう俺の帰りが遅かつたせいか望ちゃんが涙れを切らして出てきた…！

『柳田さん誰なんですかー？』

なんとこうタイミング…！

俺は何とかしてこの状況を説明したいのだが、いかんせん姉貴が近くに居るから極小声で言つた。

『（ちよつと今姉貴が来たから少し待つててくれ…！…！…！）』

だがそんな思いも虚しく望ちゃんには聞こえなかつた様だ。

『え？ なんて言つたんですか？ もう一度言つてくれる助かるのですが…』

そんな事をもう一度言つチャансなんでもう…無い…！

だから俺はもうこの手段しか無いと理解つた…！

『あ、あのー姉貴ー。ちよつと部屋散らかってるから少し待つてくれるかな？』

『何よー、前は少し散らかっても全然平氣だつたくせに…！…？…あんた今何か隠してるでしょ！…？』

『か、隠してねーよ…！…！』

『いいや、絶対なんか隠してる……と黙つかせつてドアを開けなれ……ねも……い……』

やばいこれは姉貴が切れる5秒前……俺は咄嗟にドアから離れて望ちゃんの手を掴んで奥の部屋に行こうとした……

それを望ちゃんはびっくりしたかの様に

『ちょ、ちょ何をするんですか！？　いきなり！？』

まあ男にいきなり手を掴まれて、びっくりしない女の子はないだろ。だが俺には、それすらも考える余地は無かつた……

『悪い。今姉貴が来ていて、流石に望ちゃんが居るとマズイと思つんだ。だから少しの間隠れててくれるかな？』

俺は足早にそいつと望ちゃんは

『それはわかりましたから、早くその手を離して下さ……』

『いや、良い隠れ場所があるんだ。案内しないと……』

俺はそいつたが望ちゃんは

『だから……手を離して下さ……』

流石にそこまで言わると、心にグサッと来るものがあるので今はそんな事を思っている暇は無い……

『悪い。じゃあこの押入れに隠れてくれないかな？』

『えっと、ここに入れば良いんですね？』

俺たちがそんなやり取りをしている時に

ド「ゴーン……！」

と、こう爆音が、埃が舞うと同時に、部屋中に響き渡った。

姉貴がとうとう痺れを切らしたらしい…

望ちゃんが押入れに入ろうとしていた時姉貴は…
すでに、俺の隣に立っていた！！

姉貴が何か構えている！？

その構えは敵を一瞬で片付けてしまいそうな、とても神々しい姿だった。

やばい…やられる…！俺はそう思つて目を思いつきり閉じた。

……だけどいつまで経つても、やられると思つていた気配は無い。
それどころかさつきまで感じていた夥しい（おびただしい）程の殺
気が消えていく…

俺は恐る恐る目を開けてみると、姉貴が倒れていた…！

俺は一瞬心配して、姉貴に近寄ったが、突然『グゥー』と、言ひ方で

ヌケな音が聞こえてくる。

そういうえば、姉貴は腹を空かして俺の家に来たのだ。

俺は呆れ笑いをしながら姉貴の分の料理を作りに取り掛かる。

作るのは俺と望ちゃんが食べたほつれん草の卵とじワインナー入りを作った。

俺は一息ついて時計を見てみると、8時10分であった。

俺は、ヤバイと思つて急いで支度をする。

しかし、望ちゃんはいつのままで置いて行っていいものやら、しかも姉貴が居るし、最悪の状況だった。

しかしこのはほんの少しでも心優しい姉に期待をしつつ、俺は学校に行く支度を終わらせて

望ちゃんに

『行つてきまよ』

と云えた。

すると望ちゃんは焦った様子で

『あ、行つてらっしゃいます。あ、あの、柳田さんのお姉さんをどうしましょつか？』

『適当に起きたら飯食わしどうしてくれれば助かる、後悔しないまゝ冷蔵庫に入れて置いたからお腹が空いたら食べるよ』

そう言つて俺は学校に出かけた。

第一章同居人前半…（後書き）

どうだったでしょうか？

楽しんで頂けたでしょうか？

前よりかは描写を細かく入れたつもりですけど多くなったのかな？

よかつたらまたアドバイス下さい！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2843m/>

ロリコンで何が悪い!!

2010年10月14日20時28分発行